第柒拾捌冊

二十之下

同年五月十一日左大臣橘卿宴右大辨丹比國人真人之宅歌三首

壽左大臣歌

丹比國人真人

わがやどにさけるなでしこときまいせん
ゆめさくなちるないやさきちるさけ

和歌 左大臣

まいきつきみがおほせるなでしこの
そのことごとくんきみがまにまに

或説云いやちこにほほゑみ

まいきつきみがおほせるなでしこの花のごと

右安宿王奈良麻呂等

寄味狭藍花詠

左大臣

あぢさゐのやつよのふしのごとくやつよをと
いまもわがせこやどのしきのん

同年五月十八日左大臣宴於兵部卿橘奈良麻呂朝臣之宅謌三首

治部卿船王

なでしこのはなをたをりてうつくしみ

追作　兵部少輔大伴宿禰家持

わがせこやとなでしこをいやめでもいやとこなつをなみさきいやますも

同年八月十三日在内南安殿肆宴歌二首　内匠頭兼播磨守正四位下安宿王奏之

とめどもとめどもとすひぐいかも

あきかぜはいまだふかねどわがやどのをばながうれはほにいでにけり

兵部少輔従五位上大伴宿禰家持

わがやどのをばながうれをふくかぜのおとにぞおどろかれぬるあきはきにけり

同年十一月二十八日左大臣集於兵部卿橘奈良麻呂朝臣宅宴歌一首

左大臣　高山根

ふるゆきのはだれのしたしかくしつつかみしこころをわすれえぬかも

天平元年班田之時使
續日本紀十天平元年三月癸
丑班口分田依令收
授於事不便請悉収
更班下畧人之乃口分
田七古今不侫
收授不當時不便
之弊也

天平元年班田之時使従山背國
贈薩妙觀命婦歌副荇子褁
一首　以下二首左大臣讀之云
荇　左大臣ハ是葛城王後賜橘ノ姓
葛城王

ちねさすひるはしてしくぬなもの
よるはしめるせりこも

代の使ヲ待テ班
ちなんと同記又云十一月癸巳任京及幾内班田司下畧
いふ此使ヲ葛城王也天平元年三月正四
位下ヲ叙ス此使ヲ以テ班田司ヲ兼ル
續日本紀同又曰阿波國
山背國摂田者不問高下皆悉還公即給當土百姓但在山背國三
位已上摂田者具録附使上奏以外悉収下畧此使ヲ

此使ヲ以テ班田ノ事ヲ行フ
二十五日三年自正月至是月班田既訖凡田長三十歩ヲ為段十段ヲ
為町段租稲一束半町租稲十五束
畫蒙形ニハ一ヲ小ク一ヲ赤ク指ス日本紀
ちねさすひるはしてしくぬなもの
よるはしめるせりこも
ヲ以テ歌ヲ作ル

班田ノ事ヲ行フ幸徳天皇淨御原ノ朝ニ
二十五日三年自正月至是月班田既訖凡田長三十歩ヲ為段十段ヲ
為町段租稲一束半町租稲十五束

贈薩妙觀命婦
敷　多知

ますみのおとめのそでつつみて
可爾波

かりこもみだれしみやこかな

天平勝寶八歳丙申
續日本紀十九日八歳
春二月戊申行幸難
波宮

天平勝寶八歳丙申二月朔乙酉
二十四日戊申太上天皇太皇大
后幸行於河内離宮経信以壬子
傳幸於難波宮也三月七日於河

波是日至河内國御
智識寺南行宮已南
天皇幸智識山下大
里三宅家原鳥坂
等七寺礼佛庚戌
遣内舎人於六寺誦
經親施有差壬子
大雨賜河内國諸社祝祢宜等一百十八人正税各有差是月行至難
波宮御東南新宮下居山集于河内離宮乃智識寺の
南行宮山紀乃礼佛誦經等于茲乃経信之矣
壬子難波宮之行幸山集彼紀首弟を令詠之歌
すみの江乃濱松乃ね
わすれ草
主人散位寮散位馬史國人

内國伎人郷馬國人之家宴歌
三首

兵部少輔大伴宿祢家持

すみの江乃まつ根乃きしくく
わすれ草
ふるとも乃なさきわすれめやも

散位寮散位是職員
令中もとゝゝ有乃
馬八姓史八戸也
小治田朝乃
被同馬名乃なき中乃
川とハ真せきこと云
心しきまことおゝ
あれいし中とゝ字
をもとよむなり
仙物乃安田武

ゝゝ小松にく
難波乃堀江乃
芦乃ねもころ
毎乃堀乃事
て人乃皆ゝ

おさみ小ゝとゝんとゝけさめやも

式部少丞大伴宿祢池主

或云兵部大丞大原真人
今城先日所讀歌也

蘆苅

ゝゝかりにくまるゝかちのをと
おもふこゝろ
ひとれみおさくまれ小

同年三月二十日江邊作歌三首

大伴宿祢家持

伊豆手
ありさくつゝ乃船出
都久来
於等之濱
多知奴
をしそもおもふ
ほと江より
みをさりのる堀乃事

奈良

まくらうるくこひしくらくる
みるさもほりえのれみるさつの
きぬはくもいやこころも

同月依興作歌二首　今勘至于此
聖武天皇御宇之歌
也　蓋覧之時此
集未可終於茲

大伴宿祢家持

ほそきすそ
わかのうらへふるしらなみ
おほにもこころおもはねや
のもとのいふせきいへに
ひとりこもりて
一二ふたりみてこそ
恋ひのなぐさめて
諭族歌　家持の一
族大伴古慈悲と
淡海真人三船を誘
せられて朝庭をは
ひ人給れるを
ほそきすそ
わかのうらへふるしらなみ
おほにもこころおもはねや
のもとのいふせきいへに
ひとりこもりて
一二ふたりみてこそ
恋ひのなぐさめて
諭族歌　家持の一
族大伴古慈悲と
淡海真人三船を誘
せられて朝庭をは
ひ人給れるを

麻豆
都良香自
頃疑

同年六月十七日諭族歌一首并
自此以下聖武天皇崩御之後追加
之歟聖武天皇崩御天平勝寶八年
五月二日云云此歌
六月十七日作之故

大伴宿禰家持

縁淡海三船誘出雲守大伴古慈
斐宿祢解任是以作此歌

ひさめのあれとひきつらね
かしこみおのれすめろぎの
御代のみことをもちまわりつ
つあめをもことさりて
ひさりれいわれ戸開きこのより八天降心すめろぎれ
ひさりれいわれ戸開きこのより八天降心すめろぎれ
皇孫の
日本紀第二曰干時高皇産靈尊以真床追衾覆於皇孫天津彦
彦火瓊々杵尊使降之乃授三種神寶而天降於日向襲之高千穗峯矣仙曰
ちはやひ八日向ましまあり風土記曰天津彦々火瓊々杵尊離天磐座
排天八重雲稜威之道別別而天降於日向之高千穗二上峰時天暗冥
晝夜不別人物失道物色難別於是有土蜘蛛名曰大鉏小鉏二人
奏言皇孫尊以尊御手稜稲千穗為粮投散四方得開晴千時如大鉏
等所奏撥千穗稲為粮即投散天開晴日月照光因曰高千穗二上峰
そらみつやまとのくにをあまつかみ
日本紀第二皇孫降於筑紫日向高千穗二上峰
天津彦々火瓊々杵尊
乃授天磐戸別及天忍日命天津久米命
帥来目部遠祖天槵津大来目背負天磐靫臂著稜
威高鞆手捉天梔弓天羽々矢副八十平矛帯八目鳴鏑亦
頭槌剣而立天孫之前遊行降来
仙曰萬多親王姓氏録第
十一左京神別中天神大伴
宿祢高皇産霊尊
五世孫天押日命後也
初天孫彦々火瓊々
杵尊神駕之降也天
押日命大来目部立於
御前降于日向高千穗
峯然後以大来目部
為天靫部靫負之名起於此也愚案久米大来目と大伴の遠祖に似タリ
かゝるゆへ乃安云國廻リとす
日本紀第二頁國行と

よむ
ちはやぶる神をことむけ 日本紀二曰有残賊
強暴横悪神者故汝先往平之上下畧平乃字をむけとよむ
まろびぬ人をもよりて 日本紀不順とかきまろびぬ人と作てまつろはぬ人とよめり
てきよめ 掃除
のりつ乃 是神武
天皇乃治す 日本紀
第三神武紀曰辛酉年
春正月庚辰朔天皇即
帝位於橿原宮是年
為天皇元年云々又曰
故古語稱之曰於畝
傍之橿原也太立宮柱於底磐之根峻峙搏風於高天之原而始
以諷歌倒語之用始起平蒸 むとまりかみとたきと同
おやれ日つまと 帝位とたるをいふ
ありきこころ 乃安云心の
朕か赤きねかひつる業
日本紀に赤心とかくも
きよきこころとも
すめらこと乃安云すめ
らきと同す
おやのたのことくそ
て 遠祖乃忠節ふ
たゝる人とこと
ふて授けたまふそと
うけのと 日本紀子孫と云
のりつまそてと
ハにくとよむ

やすの宮乃うちのひ
宮うちやうらみそとそ
のめりもとめくる
すめろきの日継とつき
てくる きなのみよくかくさへぬ
御代々々
天下之天皇号乃曰神日本磐余彦火火出見天皇草初天皇草
創天基之日也大伴氏之遠祖道臣命師大來目部奉衆密策能
きくしひのみみをまもりつきて
吉用良之伎
きよりまつる
安加良之伎 都流藝
世武平
安多良
伊尓之岐由
乃倶倍之
おそろふこころおりしもとそ

おやのなごりの大伴乃
うちこころ
おこるまでおもほえぬこと

イ本さく人乃心乃
さきもさきくもあるべくおもほゆ

心ゆひこころくさきくもあらなくに
ゆゆしくも
ゆゆしくもあるかも
今ゆ後ふたたびかくのごとくあらめやも

乃ちこの歌を作りて誄言を賜ふの日に
いまゆゆ
おやのなごりの
おろかにおもほえぬかも
先祖乃名を
おとさじとおもふこころ
又妾云々
妻之祖乃忠節を立ぬをいきどほりて
まつりごとせぬ
おのがじしかくしつつ
おのがつかへまつる
おやのつぎつぎ

反歌

おきつもの
日本小伝人
そとうま
おやのなのみ
すめろぎのみよ

おやすみしし
ほきこしめしし
おほきみの
おやのつかさと
おろかにおもほえぬかも
おやのなごりを

ほきこしめしし
おほきみの
おやのつかさと
さやけくおひくるものを

続日本紀十九
出雲國守大伴宿祢古慈斐内豎淡海真人三船坐誹謗朝廷無人臣之
礼禁於左右衛士府丙寅詔並放免 山紀三古慈斐三船ともにつつしめる
をとがめ時乃ひとやまと集へりて三船を誅せむことをおそれ三船
船に入てせむとすれば古慈斐を縁坐せむやうに因りて放免すとあれば
うつせみは
我身ひとつなれや
まのあたり
くまわりゆく人をとどめむ

同日卧病悲無常欲修道作歌二首

大伴宿禰家持

うつせみのかなしきよりや
さやけきひとりをとこをなる

わする日乃なけまきそひくらしつゝそ
きよまさの子もまことあらんかも

同日願寿作歌一首

大伴宿禰家持

京都煩

みやこわするす乃そ多そ生れくる
おをしねのいのちと

同年冬十一月五日夜小雷起鳴雪落霰庭忽懐感憐聊作短歌一首

兵部少輔大伴宿禰家持

けのふれまてあてるひさし

ゆまもちゐるをたゝつゝこな

同年十一月八日讃岐守安宿王等集於出雲掾安宿奈杼麻呂之家宴歌二首 主人安宿奈杼麻呂語曰奈杼麻呂設老朝集使擬入京師一因一此餞之日各作此歌聊陳所心也

掾安宿奈杼麻呂

おおきみの(於保伎美乃)みことかしこみ(美許等加之古美)うつゝ(宇良)なくこゝろやこへのある

守山背王

うちひさすみやこにつけまく

おおきみの
たゝ待九出宅掾申
給集侍よ入京礼時
よめり於保乃うら
出宅の意なり郡司
或説をいと云ふ非
王令を貴て出掾を
入京つゝ上京
するとよめり

うち日さす
とこ山柄て宝亦さこ
雪礼ふるさと家にいに
摘まろんと思し

千ひろこそくつがへすとこつげ
後十日ニ追和出雲守山背王歌一首
兵部少輔大伴宿祢家持
ももくさのあさもちかきみかうへハ
さやかにきつつおもひこそすれ
一云おもひしごとを
同年十一月二十三日集於式部少
丞大伴宿祢池主之宅飲宴歌二首
兵部大丞大原真人今城

つゆまにちへかよりきけひさしくの
内日剌宮古おほ宗
将九上京て我ゝ
を知人よ告へくハ京
ゆく我とそ一も
日ゝくすゝゝ
みてまこと告よと

ひさくの乃ゝ
堂ハ都立ゝ
こゝん花ハ都乃花
しおの上ハ雪ふれ
こゝひしくさやか
小ゝ見ゝくつゝ
こゝくふゝと
そつ雪ハ千ゝふれ
立ゝくのこゝ
ゝのとこゝ

我ゝつて思りこゝ
立ゝさを雪ハ
こゝ小ゝ
わくゝ山乃ちかきみ
ちきみとりの名り
ちきとりとりの名れハ
ちくゝこよろこゝふ
ちりちくゝハ類也
ゆまりのちくゝの
智妻女王依保川乃
ゝゝ雪ハ千ゝふれ
ゝゝのこゝ
ゝのとこゝ
おくるわれハ名乃ちきみ
たくやまちきみ之伎美
ちくゝさみよこそりちん
智努女王平後悲傷作歌一首
以下四首傳讀兵
部大丞大原今城
圓方女王
ゆまりのちくゝの依ちを
ゝゝやちてんこるとゝ
行依保川邊之時作歌一首
大原櫻人真人

作保うるこありわかれするうすひの
うすきこころもわのおもふこころなくか
藤原夫人 浄御原天皇之夫人 字氷上大刀自
わさもひなねのうまおけハやきこちの
こころもしあれハなもいふもつも
作者未詳
かきこやあやめもしらかつまて
ねのみなきわゆわのさもふみて
勝寶九歳三月四日於兵部大丞

大原真人今城之宅宴歌属植槻作 一首

兵部少輔大伴宿祢家持
わかやとの都 宇乃 都婆吉 吉 ふ
美等毛 宇恵由 のへうつくるきこ
播磨 娘 藤原朝臣執弓赴任悲別
歌一首 主人大原
今城傳讀云尓
作者未詳
ありねこえ和須良由 麻之目
きみとろもわすゆめ

餞式部卿藤原宇合朝臣赴任常陸国
作者未詳 一首
王孫のかりやすらん
赴任 播磨 かりも
ありねこえきみ

4485 4484 4483

皆已にしゆかりけれは
已にしるやしとは云し
うつりゆく時見る毎
時うつり事さかりて昔
なかの人とも世にありし
さるをも見てきたれは古
人をしのひ給ふとも此歌
は勝寳九年六月廿三日

同年六月二十三日於大監物三形王之宅宴歌一首

兵部大輔大伴宿祢家持

うつりゆく時見るごとにこゝろいたく
むかしの人しおもほゆるかも

こ詠給へり此時は世乃衰へさるゝかくあるまゝつらし此時大納言藤原仲麻呂孝謙天皇乃寵愛ゆく〳〵恵美押勝とめされし也押勝乃田村の家に招玉ひ廿一日大炊王を東宮にしたまひて世ぬさそふ此年の五月に新令乃外に紫微内相といふ職を置れて仲麻呂をこの職に任せしめ内外乃諸乃兵事をたのまさるゝ位禄なとは大臣なりなりしかは人々多くこれを坂に安宿王橘奈良麻呂大伴古麻呂大伴池主なとまて人々心をあはせて田村乃家をかこみて仲麻呂をところし東宮を以てせんとそうはかりしに六月に山背王あたとこ事を孝謙帝にかくしまうされけれは彼人々ことく七月に或は死罪或は流罪におこなはれけるかはしたなかりきこえし家持は此をこゝろさしにおなしくすへうもあらぬ朋友一族此さまなるにはかりしを家持のこゝろいためたまへりしも思ひ給ふらんと思ふ家持は大伴乃氏の先祖の名をも口おしく思ひたまへるなるへし大伴乃氏持乃大連此くは父君旅人卿なとも世におはしまさ(?)しこゝろをうつりゆく時見るごとに人のこゝろもうつる事の人しもなきをなけき給ふ也やまと續日本紀にみえたりさく花もうつろふ時ありとよみ給へりそのうへ菅の根は裏にかくれてあしひきの山中にある時にもかはらぬ物也さけるもの(?)にかはりてなかく色もかはらぬ物なれは時々うつりかはる世の中をかなしみてかくはよませたまへるなるへし

悲怜物色變化作歌一首

大伴宿祢家持

さくはなはうつろふときありあしひきの
やますかのねしなかくはありけり

大伴宿祢家持

時乃花いやめつらしもかくしこそ

めしたまふこと、あきらかに
天平寶字元年十一月十八日於
内裏肆宴詔二首
皇太子 淡路帝
天地
あめつちとてしすゐの極めなく
かくさきはふものをおかなおもひん

天平寶字元年
勝寶九寶三月二旨
天皇乃寢殿の茅壁
乃裏より天下大平とゝもに四字をもちて五月八日用下帝釋標知天皇命百年とゝ
となりかこ板小勝寶九寶八月十八日とゝめて天平寶字元年とす
續日本紀ゝ
皇太子ハ沖諱ハ大炊寶字元年四月廿三日皇太子舍人親王淳仁
あめつちと照る日月の類衆ニさきそふ
かくめでたきことはをりをりにかくもあらんとこしへに世を謀

又乃年乃八月ゝさきあれとゝもに
内相藤原 仲麻呂也
續日本紀三勝寶九
寶五月丁卯以大納言
從二位藤原朝臣仲麻
呂為此寺微内相ゝこと
ゝさふらもゝこそわさ
乃妻ゝこそれるわさ
あせそと玉乃ゝ山乃
と彼をふ乃麻呂古麻
呂をふ乃仲九とをふいやら
し大子と倾んこせ
と吟ゝてゝこそわさ
あせそと語るやや女
帝乃寵をものそ
なこれる心乃ほの

内相藤原朝臣
いさみごとしおほせつかまつり
ぬれば今はゝまたゝもの
ゝごとなし

同年十二月十八日於大監物三形
王宅宴歌三首

主人三形王
千雪ふるふゆをも冬のごと常なく
おもほせばこそ物もかなしけれ

大藏大輔甘南備伊香真人

宇知奈婢久 波流
うちなびくはるやなぎ
こよりたちくよかすみ
こもりつつうぐひすの
なくこゑきかぬひさ
ともしるしなくて
右中辨大伴宿禰家持

薄愛離別悲恨作歌一首 月未詳
石川女郎 藤原宿奈麻呂朝臣之妻
おもふにしあらばかくばかり
こひじとやまとこころをば
ちくさのものにあらねども
ひとのこころをしるよしも
なみにのみしきつつ
あるにしあらねば
ぬばたまの
よるはすがらに
ねがみをば
ときもかきやらず
ひもだにも
むすばずながく
あしたゆふべに
なげきつつ
ありとしりせば
あをによし
ならのたまでに
しるしてし
ひとのことばは
いまもかもみる

同年十二月二十三日於治部少輔
大原今城真人之宅宴謌一首

右中辨大伴宿禰家持

都奇 餘米婆 波流
ふるゆきをみやこにおきてかへりこし
あがをかもとをいまかとまつらむ

天平寶字二年春正月三日召侍從
豎子王臣等令侍於内裏之東屋垣
下即賜王帰肆宴于時内相藤原朝
臣奉勅宣諸王卿等隨堪任意作
歌并賦詩仍應詔旨各陳心緒作
歌賦詩一首 未得諸人之賦詩并
作歌也 此歌依大藏政不堪
らちてとの間の別
妻病死の時作
ぬばたまの
よるはすがらに
ねがみをば
ときもかきやらず
ひもだにも
むすばずながく
あしたゆふべに
なげきつつ
ありとしりせば
あをによし
ならのたまでに
しるしてし
ひとのことばは
いまもかもみる

大原今城真人之宅宴謌一首

右中辨大伴宿禰家持

都奇 餘米婆 波流
ふるゆきをみやこにおきてかへりこし
あがをかもとをいまかとまつらむ

天平寶字二年春正月三日召侍從
豎子王臣等令侍於内裏之東屋垣
下即賜王帰肆宴于時内相藤原朝
臣奉勅宣諸王卿等隨堪任意作
歌并賦詩仍應詔旨各陳心緒作
歌賦詩一首 未得諸人之賦詩并
作歌也 此歌依大藏政不堪

右中辨大伴宿禰家持

始

こひまろがそのねのうちなれをねもとめてなくきりぎりすかな

也

ふるさとの秋の野辺にすだくなる虫の音聞けば都しぞ思ふ

とよめり 後れ居て恋ふる日数の重なれば心もしのに思ほゆるかも

右中辨大伴宿禰家持

八月廿日の夜二更に及りて漸に寝ねむとして数種の夢相見き

覚めて即ち悲しび心に作りて感緒を述べ兼ねて即ち口号に

代へて二首

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くや雄鹿の妻恋ふらくを

我が屋戸の萩の下葉は色づきぬ来まさぬ君や黄葉散るべく

右中辨大伴宿禰家持

八月廿日の夜二更に及りて漸に寝ねむとして数種の夢相見き

覚めて即ち悲しび心に作りて感緒を述べ兼ねて即ち口号に

代へて二首

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くや雄鹿の妻恋ふらくを

我が屋戸の萩の下葉は色づきぬ来まさぬ君や黄葉散るべく

哥なれば事のつづきもとゝのはず八句あれども終句のみ

詠之

註大藏政二ハ諸國乃貢物金銀珠玉を出納あるの官なり

ゆゑに大藏卿と云ふ

天平勝寶二年春正月二日依例賜侍宴於内裏仁王會訖

仁王會 公事根源云仁王護國般若經を講ぜらるゝ故に

名づく

同年正月為七日侍宴預作歌一首

依仁王會事訖以六日於内裏賜渌ノ肆宴因不奏之

右中辨大伴宿禰家持

新年の初の春の初の日に降る雪のいや重け吉事

二月十日内裏の梅の花を賞でて各作歌

梅の花今咲けるごとかくしこそ常なき世には有りけらしも

二月十日内裏の梅の花を賞でて各作歌

梅の花今咲けるごとかくしこそ常なき世には有りけらしも

正月七日宴を賜ふ歌一首

右中辨大伴宿禰家持

祇承久しくなりぬるかも入りかてにとりもとどめぬ君が家の苑（愚案甲）

右の一首は本同じ

正月六日内庭に於いて以六日於内裏召諸王等賜酒と云ふ内庭この裏の謂ひ

林惟

うちなびく春の柳と我が宿の梅の花とを見つつ今日は暮らさむ

同年正月六日内庭假植樹木（カリウヱキジュ）

以作林惟（ハヤシヲナス）而為肆宴（シエン）調一首

右中辨大伴宿禰家持

打奈婢（ウチナビク）久（ヒサ）、波流（ハル）

うちなびく春の柳と我が宿の梅の花とを（宿恵之樹間）

同じ花を折りかざしつつ飲みてば散るとも（キヨ）

同年二月於式部大輔中臣清麻呂朗臣之宅宴歌十首

治部大輔大原今城真人（為橋）

うめのはなにほへるそのにうぐひすはなきてちるらむはるかたまけて

主人中臣清麻呂朝臣

うぐひすのきなくやどのうめのはなちらすにはあらじかはらざるとも

右中辨大伴宿禰家持（伎麻呂奴）

うぐひすのなきしなばうめのはなかたみにやどにふりかくさなむ

安路自（伊藝麻都）

うぐひすのなきしうめのはなちらばわれさへともにいやとしのはに

主人中臣清麻呂朝臣

志伎（許散婆）

わがせこがかざしのためとうぐひすのなきつるうめをおらずあらめやも

右の件の歌は二月の宴に依りて誦詠せるものなり

主人中臣清麻呂朝臣

ちはやぶる神の社しなかりせばうぐひすのこゑをだにかきかまし

治部大輔市原王（イチハラノオホキミ）

宇梅

うめの花（ハナ）青柳（アヲヤギ）かづらき折（ヲ）りつけ（ツケ）つつ
うたげ（ウタゲ）つらくは（ハ）今日（ケフ）にしあるべし

右中辨大伴宿禰家持

やちくさに（ヤチクサニ）かしこくあれど（カシコクアレド）
あかねさす（アカネサス）君（キミ）にしあるべし

大藏大輔甘南備伊香真人（タイソウカンナビノイカノマヒト）

烏梅（伊藤）

うめの花（ハナ）咲（サ）きて散（チ）りなば（ナバ）
その実（ミ）ぞと（ゾト）見（ミ）つつ偲（シノ）はむ（ハム）
かたき心（コヽロ）も（モ）

右中辨大伴宿禰家持

やちくさの（ヤチクサノ）人（ヒト）の（ノ）見（ミ）つつ
賞（メ）でけむ（ケム）梅（ウメ）を（ヲ）我（ワ）れ（レ）
かくしつるかも（カクシツルカモ）

主人中臣清麻呂朝臣

うるはしと（ウルハシト）言（イ）ひつつ（ヒツヽ）
君（キミ）が（ガ）插頭（カザ）せる（セル）
梅（ウメ）の花（ハナ）かも（カモ）

和我世呂（イカ）

治部少輔大原今城真人

伊藤 能中良尓 都称 欲比 伎須 挙

うぐひすの（ウグヒスノ）
かしらふる（カシラフル）までに（マデニ）
かくしつつ（カクシツヽ）
をれば（ヲレバ）うれしき（ウレシキ）
梅（ウメ）の花（ハナ）かも（カモ）

右中辨大伴宿禰家持

梅の花（ウメノハナ）
今咲（イマサ）けるごと（ケルゴト）
散（チ）り過（スギ）ぬ（ヌ）べく（ベク）
我（ワ）が（ガ）思（オモ）へる（ヘル）
君（キミ）に（ニ）もあるかも（アルカモ）

主人中臣清麻呂朝臣

梅の花（ウメノハナ）
散（チ）らくは（ラクハ）惜（オ）しと（シト）
我（ワ）が（ガ）思（オモ）へる（ヘル）
君（キミ）は（ハ）散（チ）りこす（リコス）な（ナ）
我（ワ）が（ガ）園（ソノ）の（ノ）梅（ウメ）
（以下欠）

池乃磯と紀乃磯浦とに共に灘公の館窟のあれや上句序ことわり多
と拘泥とあらくめされいあらかにとも
一ふさぶれのうち乃
乃安云ふ云ふ君ハ
まもるそ心底代
こをそ君ハきくふ
一る也 要聖武
天皇高圓に離宮を
て御幸六巻にふ
君ハ君ぞとそれ
よりくよもぎ
のくうへのハ野の上の祖
次の奇ふ尾の上
のとかと通り
一ふさぶれなのう

五十ノ五十二

依興各思高圓離宮處作歌 五首

右中辨大伴宿禰家持

一ふさものの乃くうへぬれやあれな乃
多。き。さ。のこよこをそ。け。

治部少輔今城真人

一ふさぶれおのうへぬれやいつれぬも
たく。き。さ。れ。ケおとそれめや

主人中臣清麻呂朝臣

たうさものせへそふ。ふさぶれすまうおふ

ちたにふれんわりおるさ。ケも

右中辨大伴宿禰家持

そふふさぶれすまのりんおおさ。ケの
めき。野多ふ。き。めゆ。へ。も

大藏大輔甘南備伊香真人

おおさ。ケのしぬすめすし一ふさぶれ
のへこるうたねのケ一あのゆ

屬目山斐作歌 三首

大監物御方王

き。乃もさ。ケのこれ当乃乃ふれい

芝も智武の沖乃と志
じと志てひさ。ケも
たうさぶれのへふ萬
野へとさふ萬孔未夜
こふを祖好る読て
未こよ三ふさ君
そと智武を待る
そふ萬孔多とふん
そ萬孔多とふん
いそん祖好めき
野へこハ離宮る能せ
させのひ一ふさぶれ
て行多ひ一ふさぶれ
とも志めふんを
おふさ。ケのしぬ
今も久乃孔終て召

安之婢
ひらまるもさきよりくるりし

右中辨大伴宿禰家持

伊豫 救豆
いけみつはきさへくさきかふり
蘇我 古倍礼奈
あひかいまをそてふこゆれな

大藏大輔甘南備伊香真人

いそのみやいけみつてるまで
さくるひのちくまくおも

同年二月十日於内相宅餞渤海
大使小野田守朝臣等宴調一首

右中辨大伴宿禰家持

渤海 仙曰續日本紀
第十卷云渤海郡者
舊高麗國也 渤海者
海水踊騰白地彼
國殊海水踊漂勢也
狛条葉二泰

いそのうらくるひきよせまひきやくさ
ほりむことをくおねそいけん

同年七月五日於治部少輔大原今城真
人宅餞因幡守大伴宿禰家持宴歌一首

大伴宿禰家持 波擬

秋風乃寸毛吉安比久毛
宇故久倍久須乃比乃和乃母

三年春正月一日於因幡國廳饗
國郡司等之宴歌一首

守大伴宿禰家持

秋風乃吉吹末久尓
因幡守

（朱）乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘其騰

萬葉集巻第二十終

貞享三丙寅年八月廿日己上刻雨天書新玉津島菴下 墨付五十四枚

同年十二月廿九日辰剋終、再考之功者也 新玉津嶋窩居士 六十三歳